

令和 2 年 4 月 30 日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980148

氏名 大庭 大

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先: 都市名 オックスフォード (国名 イギリス)
2. 研究課題名 (和文) : 政策評価における規範的次元の理論化
3. 派遣期間: 平成・令和 2019 年 4 月 16 日 ~ 平成・令和 2020 年 3 月 28 日 (347 日間)
4. 受入機関名・部局名: オックスフォード大学
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先のオックスフォード大学では、ブラヴァトニック公共政策大学院のジョナサン・ウルフ教授の指導のもと、様々な公共政策の問題に、哲学的・規範理論的考察がどのように関わり、また貢献しているかを中心に学んだ。

具体的な研究主題として、主に次の3点について検討を進めた。

第一に、公共政策の検討・決定過程における哲学的・規範的考察の役割の明確化。これについては、問題設定や推論のあり方を明確することで民主的熟議の促進・手助けとしての役割を果たしていることが、その中心的意義となることを確認した。

第二に、ジョン・ロールズの正義の理論における、障害者にとっての就労及び職業訓練の機会の位置づけについて。これは機会保障及び現物給付に焦点を当てる事前分配政策が、社会の最も不利なメンバーにどのような保障を提供すべきかという問題に関わる。

第三に、近似化 (approximation) の戦略について。これは目指すべき最善の社会制度が実現不可能である状況において、それにできる限り近いものを実現するという戦略である。この戦略には、次善の問題 (problem of second best) と呼ばれる問題があることが指摘されている。この問題が、社会制度の文脈でどの程度の脅威となるか、またそれを回避する方法があるかを検討した。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先大学での研究成果をもとに、規範的次元を踏まえた分配制度・政策の評価を主題とした博士論文を執筆する。

また、上述の具体的研究主題の第二、第三について、二つの英語論文を準備しており、1年以内に英語圏の査読付き研究雑誌に投稿する予定である。1本目の“Fair Assistance for Productive Contribution: Place of Job Training in Justice as Fairness”と題する論文はロールズが描く正義に適った社会制度構想において、様々な障害を持つ人が機会にアクセスするための仕組みに焦点を当てたものである。2本目の“Approximation as a Default Strategy”と題する論文は、目標とする望ましい社会制度を近似的に実現するアプローチに対して提示されている懐疑論を吟味し、近似のアプローチが抱える問題を部分的に認めた上でなお、それがデフォルトの戦略として有効性を持つことを論じるものである。これらについては、本プログラムでの派遣期間中にもMancept workshopやOxford Work In Progress Political Theory Seminarなどの学会・研究会で途中経過を発表している。

今後も国内学会・国際学会にて報告を計画しているが、新型コロナウイルスの影響で学会の中止や予定変更が相次いでいるため、現時点で具体的な見通しはない。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

公共政策に関する規範理論・政治哲学的分析の第一人者であるジョナサン・ウルフ教授の指導のもと研究を進めることができたほか、オックスフォード大学という最先端の研究者や大学院生が集まる場で研究を行うことができた。これを通じて、最新の研究動向にも触れることができた。具体的な研究内容について新たな知見が得られたことに加えて、そのような環境で1年間研究をすることで、国際的な研究コミュニティー・学会において継続的に研究を発表していくための訓練を積むことができたことも大きな成果である。

また、欧州の地理的利点を活かして、ポルトガルでのSummer School on Political Philosophy and Public Policy、イギリスでのMancept Workshop、やOxford Work In Progress Political Theory Seminarなどの学会・研究会で研究報告の機会を持つこともできた。